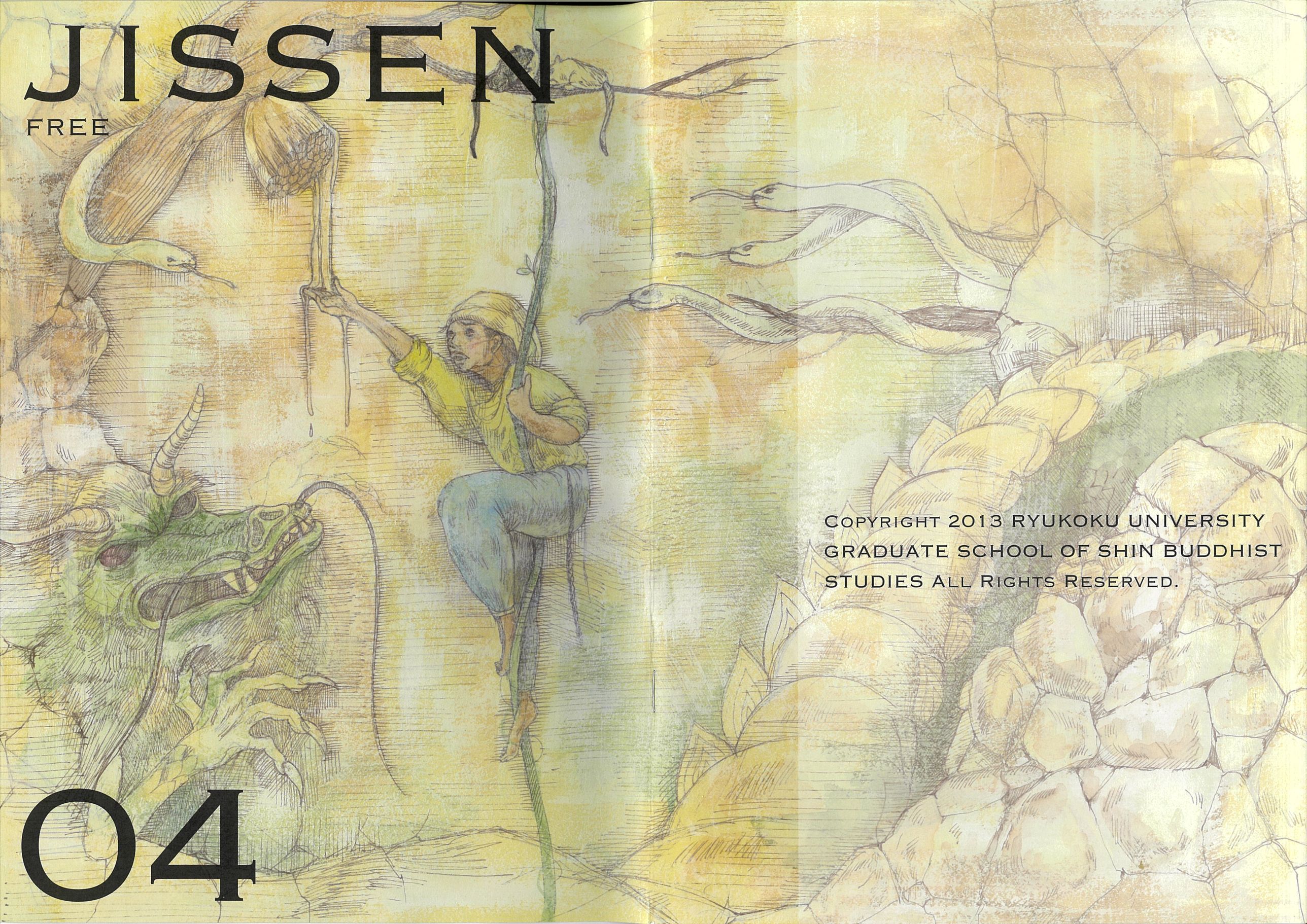
JISSEN

FREE



Copyright 2013 Ryukoku University
Graduate School of Shin Buddhist
Studies All Rights Reserved.

04

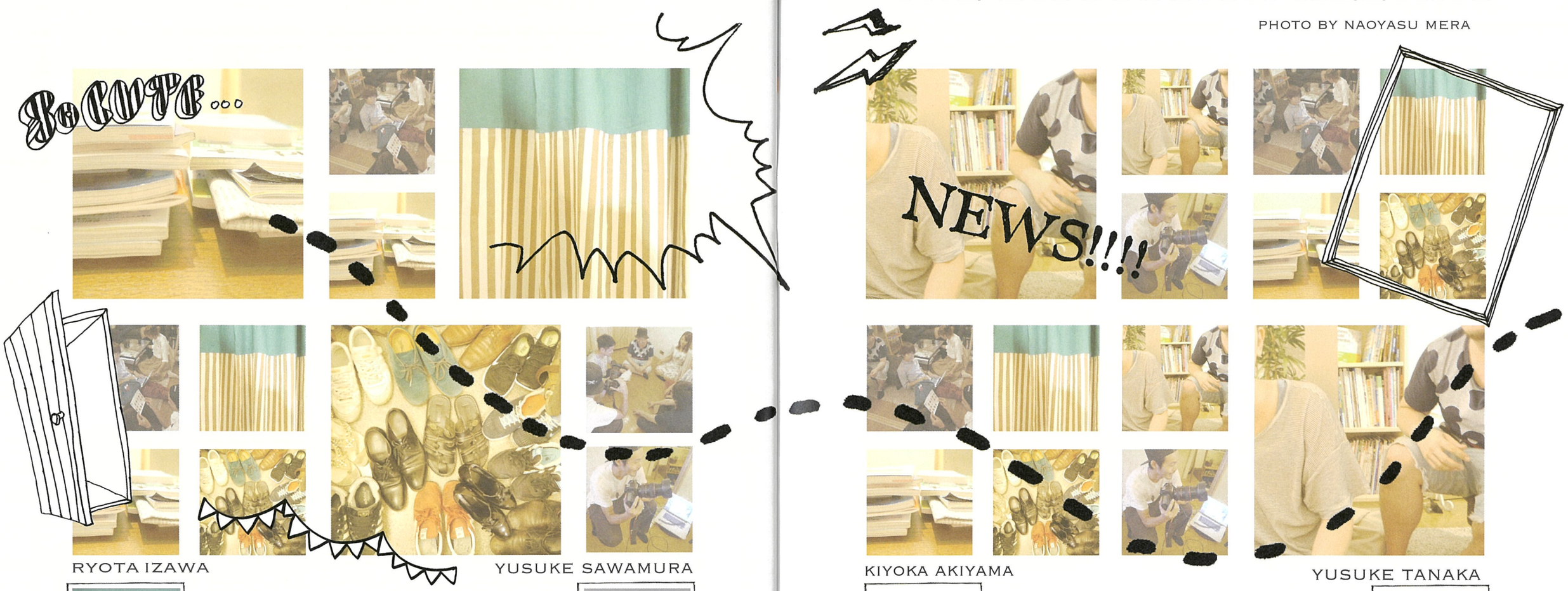
P4-P15 The discusstion meeting
P16-P19 Social Practice Tell mee times × JISSEN
P20-P23 Practical Activities
P25-P26 SORYO for EVERYTHING
P27-P28 法話
P29-P30 JISSEN DIARY
P30 INFOMATINON
P31 JISSEN Symposium

JISSEN

人は常没　流転の群生
苦悩の旧里はすてがたく
名利に惹かれ　愛欲を漂う

THE DISCUSSION MEETING

PHOTO BY NAOYASU MERA



RYOTA IZAWA

伊澤　諒太

栃木県宇都宮市出身
1987年生まれ。
2009年株式会社ハタプロの運営を開始。
2009年就活支援組織「しゅうかついったー」の運営を開始。
2010年3月中央大学総合政策学部卒業。
2011年著書『スマートフォン就活術』発行。
2013年よりシリコンバレーのベンチャー企業「Evernote」日本法人のアンバサダーを兼務。
スマートフォンアプリやソーシャルメディアを取り入れた新しいカタチの人材育成・教育講座を企業や教育機関向けに開発・提供する事業を展開。

YUSUKE SAWAMURA

澤村　祐介

栃木県那須烏山市出身
1986年生まれ。
2009年アパレルブラント『QUOLOMO』『erect81』にてデザイナーとして活動。
2010年3月東京藝術大学美術学部デザイン科卒業。
2010年4月東京藝術大学大学院美術研究科修士課程デザイン専攻入学。
2010年9月「世界は好きで創られるデニムデザインコンペ」にて準々グランプリ受賞。
2012年3月東京藝術大学大学院美術研究科修士課程デザイン専攻修了。
2012年4月より東京藝術大学美術学部デザイン科非常勤講師および芸術情報センター教育研究助手を兼任。

KIYOKA AKIYAMA

秋山　清香

宮崎県延岡市出身
1987年生まれ。
2010年3月鹿児島大学教育学部卒業。
2010年4月ジュエリー会社へ入社。販売を経て東京本部へ移動。商品開発等に携わる。
退社後はサロンモデルや広告モデルなどをしながら、様々なイベントの企画に携わる。
現在はモデルを続けながら、独自のスタイルである移動式室内カフェ「KIYO CAFE」を展開。

YUSUKE TANAKA

田中　佑典

福井県福井市出身
1986年生まれ。
2006年4月カルチャーマガジン「LIP」創刊。
2009年3月日本大学芸術学部文芸学科卒業。
2009年4月クリエイティブエイジェンシー「Yes, I am.」入社。iPhone用アプリケーションをはじめとする様々なメディアの企画や編集に携わる。
2011年8月より台湾と日本を繋ぐカルチャー誌として「LIP」をリニューアル。
2014年現在、日本と台湾間をつなげる企画やプロデュース、その他クリエイティブサポート等を行う。

『時には宗教の話を』

若い世代が宗教について話す機会は少ない。都心に暮らしていればなおさらである。そこで今回、都心に暮らす若者を代表して、職種の違う4名の男女にお集まり頂き、「宗教」をテーマにして話し合いをしてもらうこととした。

現代の若い世代の人たちは、宗教に対してどういう意識を持っているのか、どう接していこうと考えているのか。様々に意見の飛び交う座談会となったのではないだろうか。是非ご一読して頂きたい。

—まず簡単に皆さん自己紹介からお願いします。

伊澤「僕はハタプロという会社を経営しています、伊澤です。教育系の事業を展開しています。本日はよろしくお願いします。」

田中「田中です。LIPという雑誌の編集長をしていますが、主には台湾と日本をつなぐためのプロデュースやコーディネートをしています。よろしくお願いします。」

秋山「私はサロンモデルや広告などのモデルをしています、秋山です。よろしくお願いします。」

澤村「僕は東京藝術大学で非常勤講師をしている、澤村です。よろしくお願いします。」

—ありがとうございます。では始めに、定番ではありますが、皆さんのご実家の宗派などをお聞かせ頂けたらと思います。

伊澤「詳しいことは分かりませんが、実家は天台宗です。」

田中「うちは浄土真宗の西です。」

秋山「私は知らないんです。でも、題目をあげるところです。」

澤村「僕は多分、浄土真宗です。あまり詳しくは分かりません。」

—当雑誌は浄土真宗本願寺派であります龍谷大学大学院実践真宗学研究科という研究科から発刊している雑誌になります。そこで皆さん、浄土真宗という宗派をどういう宗派だとお思いか、お聞かせ下さい。

伊澤「多いというイメージです、信仰している方が。それと南無阿弥陀仏というワードと、唱えれば極楽浄土へいけるという話とかでしょうか。歴史の教科書にそういう風に書いてあったように思います。」

田中「日本で一番大きい教団ということと、他力本願というワードとかですか。他力本願で南無阿弥陀仏で何か全部オッケーみたいなイメージです。」

秋山「ごめんなさい、全然知らないんです。名前だけは知ってました。」

澤村「僕も、伊澤さんと田中さんお二人が言っているイメージです。今は社会の教科書とかにも載っていますよね、ある程度の情報としては。」

—では続きまして、「宗教」という言葉にどういったイメージをお持ちかお聞かせください。

伊澤「そうですね、あまり身近ではないというイメージがあります。仏教ではなく宗教のイメージですよね？あやしい新興宗教とかが多すぎて、やっぱり、あやしいというイメージを持っている人が多いんじゃないでしょうか。別に仏教やキリスト教といったものに、そういったイメージはないのですが。」

田中「そういうことだと思います。ワードのイメージがありますよね。宗教という響きが、ちょっと。実際は信用しているんですが、そういった悪いイメージを含めて、宗教という言葉にそんなイメージがあります。」

澤村「今の若者にとってはあれですよね、何年か前に大きな事件があったじゃないですか、それがやっぱり、子供ながらにすごい印象だったわけで。それが、刷り込みと言いますか、今の宗教のイメージにつながっているという思いがあります。ただでも、宗教をポジティブに捉えたものが、たとえば聖お兄さんという漫画だったり。ああいう、漫画の題材にしたりっていうのは、イメージとして面白おかしく描きましょうよっていうのがあるわけで。とは言え、それも最近のことですし。今の子たちからすると、宗教ってあのコミカルなお話でしょ？となるかもしれませんが 僕たちの世代からすると、やっぱりそういった事件の方がインパクトあります。」

田中「そうですね、宗教と聞くと仏教やキリスト教といったイメージより

も、カルトといったイメージが湧くかもしれません。」

澤村「それに、未だに話題にあがったりするじゃないですか、どこどこの教団の人が捕まったとか。それってやっぱり、イメージとして良くはないです。つまり僕が言いたいことは、現段階での日本の宗教のイメージは、刷り込みでしかないのではないかと思うんです。たとえば海外を考えた場合、アメリカは人種のサラダボウルと呼ばれたりするじゃないですか、つまりは多種多様な民族が混在しているわけで。だから、ひとりひとりが持っている宗教の価値観だったり、その人自身の持っている社会性みたいなものって、ある程度定着してるじゃないですか。ただ僕のイメージとして日本は、アイヌや琉球といった民族関係はありますが、一般的に考えると多種多様な民族が混在しているというわけではないわけで。

つまり、昔から孤立している日本という島国があって、それが江戸時代には鎖国の時代が続いて、そして黒船来航があって、アメリカから半強制的に、あなたたち日本人になりなさいよと言われることになった流れがあるわけじゃないですか。そのタイミングで、それまでの藩というくくりの価値観から国家というくくりの価値観に、半ば無理矢理なったとも言えるわけじゃないですか。そこで生まれた考え方っていうのが、日本独特の文化をもっと外に出して行きましょうよっていうものであって。だから、ある意味宗教という概念も、こういう言い方をして何ですが、もしかしたら刷り込みと言いますか、そのときに作り上げられた文化なんじゃないかなという認識があります。元々あったという事実はあると思いますが、たとえば富士山、あの山はありましたけど、富士山という名前がついたのは明治時代であって。昔からあの山を崇めてきた事実と、富士山を崇めましょうよという文化というのは違うわけじゃないですか。そういう文化がありましたよっていうのは、文化としてはなかったわけじゃないですか。宗教も、えらい人がいて、その人がいろんな人を救ったという文化があったかもしれないですが、そういうのがあったということが広がって広がって、広がって認識されているわけですから、刷り込み教育には近いのではないかと思います。宗教自体が本質としてそういうものなのかなと思いまして、実際に現代社会の中で、そういう価値観認識になりつつあるんじゃないかなと思います。」

—ありがとうございます。続きまして、宗教そのものについては皆さん、あまりご存知ではないかと思いますが、ではなぜ知りたいともお思いにならないのか、という点についてお聞かせください。

秋山「それは周りに知っている人がいないからとかじゃないですか?」
澤村「確かにそうですね。お坊さんとまでは言いませんが、世間的にそういうことに詳しい人が少ないんじゃないかなと思います。」
秋山「あとなんか、曲がってることとか言うじゃないですか。こっちの宗教の人はあっちの宗教のことを悪く言うし、あっちの宗教の人はこっちの宗教のことを悪く言うしみたいなのが、私はあまり好きじゃありません。」
澤村「少なからず、一般的にいうところの派閥に近いものは感じます。」
田中「何かしらの揉め事の原因によくなるというイメージはありますよね、争い事と言いますか。」
秋山「でも、なんで日本では世界で起こっているような戦争と言いますか、内戦と言いますか、そういった争いにならないのかは不思議です。」
澤村「分かんないですけど、ひとつの国民性みたいなところで、ヨーロッパもそうですけど、革命って時代背景があるじゃないですか。でも日本にはそういう、革命といった時代背景がないじゃないですか。国家が変わるっていうタイミングが、反体制的にさせられてしまった分、今の時代で言えばストライキとかデモ活動っていうのがそこまで盛んじゃなく、そういった意識の中で国民性が生まれてきている分、仏教イコール思想、思想イコール人と違うこと、理解し合えないっていうような、自分が強い、相手が強いっていうことではないという思想で国民性が生まれてきちゃっている分、日本における宗教ではそういう争いといったものが少ないのかなと思います。逆に、言い方を変えれば主張が少ないという訳で、自分たちが正しいといった主張も少ないと思えるのですが。だから、相手の宗教を貶めてでも自分の主張を通すといった価値観は、日本人にはあまりないように思いますし、そのせいで宗教が浸透しづらいという気がします。結局、なんとなく入っていると言いますか、僕たちが自分の宗教に関心がないというのも、もちろんありますが、実際詳しく知らないというのは、なんとなく日本人というのと全く一緒で、なんとなく浄土真宗みたいな、そういう感じなのかなと思います。」

田中「結局、日本人って、宗教と距離があるから、自分たちのアイデンティティとして宗教がない。海外の人たちは、アイデンティティとして宗教があるように思いますし、そういう意味では、日本に比べて、海外の人たちの方が宗教と近いのかなと。日本って神仏混合じゃないですか、神と仏の区別はあんまりつかないですし、これと（手を二回拍手）これ（合掌）の違いはよく分からないですし、皆分からないと思います。逆にそれが日本人の特徴になっていると言えるんじゃないでしょうか。」
伊澤「僕は、日本では教育の問題なのかなと思うところがあります。アメリカとかはやっぱり学校の中、中学生く

らいで、日曜には教会行こうぜ、みたいなのがあるように思います。僕の場合は、近所にお寺がありまして、会社を経営している身でもありますので、商売繁盛を願ったり、祈願などでお寺や神社に行ったりしますが。」
澤村「それは、先ほどの神仏混合とかですか?もともと日本人自体、神なのか仏なのかにこだわっていないように思いますが。」
伊澤「僕は神仏にこだわっていないと言いますか、うちの家族は、父親方が天台宗の家系で、母方が神道の家系なんです。だから母方の祖母のお葬式は神道でやって、父方の祖父のお葬式は仏式でやってと、どっちも経験しています。一応、父方の宗教に属しているんですが、自分が天台宗に属しているという認識はあまりありません。神社に行かないとかではないですし。それに、出身の高校がキリスト教でしたので、それこそ土曜日は毎週聖書とかを読まされたりしていました。家には仏壇があって、でも学校に行ったら聖書を読んで、かといって祖母が亡くなったら神道のお葬式が始まるし。日本って環境自体が、別にどこの宗派が多いとか感じないですし、仮にイスラム圏とかでしたら、父も母も親戚もイスラム教だから、それが全てなんだと思うかもしれませんが。」

田中「うちにも仏壇と神棚があって、それが普通のことだと思います。」
秋山「あ、うちもありました。」
田中「普通日本はそうですよね。」
澤村「うちもありましたね。」
伊澤「そういう家、多いですよね。」
田中「僕は子供の頃からチーンとして仏壇に手を合わせて、その後、神棚にはパンパンと手を叩いて、それから学校に行くというのが習慣でした。毎朝かかさなかったですよ。親に決められていましたので、一日もかかさなかったです。」
澤村「それが普通だったってことですか?」

田中「実家にいる頃はそうですね、毎日かかさずでした。子供の頃は、それを怠ると罰が当たるからと言われて習慣になっていました。それに、高校の頃には学校に仏教の授業があって、少し知識をもらったので、やらなきゃなと思っていました。それと僕のイメージですが、仏壇はお願い事をするんではなくて、あれは自分だと。浄土真宗って無じゃないですか?だから自分を出すと言いますか。なんかすごい力を持っている人がいて、その人にお願い事をして、願いが叶えられるとかではなくて、自分に対して、今日はこういう感じでやっていきますみたいなのを、仏壇に対して言うといいますか、自分に対して言うと。仏壇はそういうものだと感じていました。それで、願い事は神棚に言う。そういう違いだと思っていますし、言われてきたように思います。」
秋山「それなら、よく分かりませんが、やります私も。仕事の前とかに。自分の中で今日はこういう感じでいこうとか。」
田中「それはでも、仏壇の前とかじゃなく自分自身の中での意気込みの話ですよね?」
秋山「そうです。でも、それが仏教というならと。私もやるかなぁと思いました。」
澤村「でも、ある意味認識として、そのくらいの程度じゃないですか?僕達の世代というか、若い人たちからしたら。実際、秋山さんも家に仏壇も神棚もどっちもあったということで、生まれたときからそれはあるわけで。田中さんはわりと特殊だと思います、その二つの違いが分かるというのは。僕からしても、どっちがどっちなのかというのは分からないですし。例えば親族が亡くなって、おじいちゃんの遺影とかが仏壇にあると、再認識とかはありますが、かと言ってじゃあなんで神棚じゃだめなのかなという疑問はわくわ

けで。全く同じ意識の中にあるわけですから、いってるところは一緒でしょみたいな、そういう意識があるわけで。それに、そういうのが実際、教育として施されてないわけですから。」

伊澤「宗教についての教育が現代は行われていない認識はありますが、私達の上の世代では逆に宗教を教えこませるといったような教育が施されていたのでしょうか？」

—戦後の世代においては政教分離が一貫しているため、基本的には、宗教教育は施されていないと考えて良いかと思います。

澤村「でも教育って学校だけじゃないじゃないですか、田中さんが親に言われてきたことも一つの教育ですし。要は、そういう文化がないと言いますか、教育という言い方をしましたが、教育も一つの文化ですし。たとえばお正月にお参りに行きますとか、あれは一つの文化じゃないですか。別に強制的にやっているわけじゃない。こういうこともありますっていうひとつの文化じゃないですか。それをもうちょっと強く捉えてるのが、多分、田中さんの家の使い分けと言いますか、そういうことなのかなぁと。実際秋山さんとかは、お参りしたりとか、そういうタイミングってありますか？」

秋山「お参りするタイミング？」

澤村「例えば、お寺行きました、神社行きました、そういう機会があると思うんですよ、人生の中で。その中で実際、お寺行ったからこういうお参りしなきゃいけないとか、神社行ったからこういうお参りしないといけないっていう使い分けはしてますか？」

秋山「お寺は…なかなか行きません。神社は、旅行に行ったときとかによく行きますが。」

伊澤「お盆休みに帰省したときなんかに、お参りはされないですか？お墓参りだったり。」

秋山「お墓にお参りするのは、あれは仏教ですか？お墓参りは好きです。」

澤村「じゃあ逆に、お墓に行くっていう行為自体が、お寺に行くってことと別に結びついてないってことですよね？」

秋山「そうですね…そうです。」

伊澤「でもお墓はお寺にあるんですよね？」

秋山「お墓はお寺じゃなくて、実家のお庭にあります。」

田中「え？特殊ですね。普通はお寺にありますよね。」

秋山「え、本当ですか？お寺はまた別のところにありますし、そういう環境の中で育ってきたので、お墓に行くという行為とお寺に行くという行為が結びつかないんだと思います。」

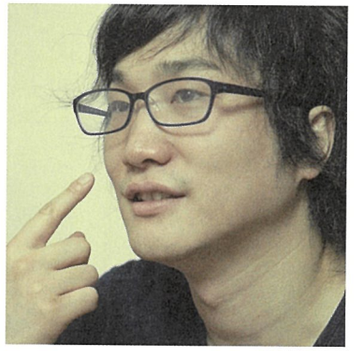
カメラマン「伊藤さんに素朴な疑問なんですが、お寺さんが良い車に乗ってたりといった話を耳にすることがあるんですが、それについてどう思われますか？」

伊澤「私は会社を経営していますのでそういった話には大変興味があるのですが、お寺さんがいい車に乗れるというのは、土地などをもっているからということではないですか？」

—一応、私の知識範囲で答えさせて頂きますと、まずお寺は所謂自営業扱いになります。なので、車を購入する際は、お寺に必要であるため経費として購入することになります。

カメラマン「でも、カメラマンも自営業ですし、経費で車も購入することになりますが、さすがにそこまでの車を購入するためのお金が用意できません。」

—そうですね、お寺は宗教法人でして株式会社ではありません。なおかつ、非営利法人にあたりますので、一般企業でいうところの利益にあたる部分の分配がありません。経費としてかかった以外のお金は利益ではなく、ただの収支差額になりまして、毎年プール金として積み立てられていきます。



伊澤「宗教法人ということは税務対策などする必要がなく、経費として落とす必要もないのでは？」

—宗教法人にも当然税金は課せられていまして、きちんと税務処理は行います。少し詳しくお話しますと、宗教法人は、法人税が非営利法人のため非課税でして、固定資産税、都市計画税といった不動産取得に関わる税金が宗教活動に使用すると認められた場合、非課税となります。これは、宗教法人の所有だから非課税、ということではありません。それから、免税という概念ではないと注意して欲しい、と大学院の講義で教わりました。

カメラマン「そういうことなんですね。」

—では話を戻しまして、お聞かせさせていただきます。皆さんには宗教の

ことをもっと知りたいや歩み寄ろうといった気持ちはおありでしょうか？

伊澤「知りたいといえばもっと知りたいです。自分の親もそろそろ身体が弱ってきていると思うと、お葬式のことだったり。自分は長男なので、そのうち何らかの形で関わらないといけないんだろうなと思うと、色々知っておかないといけないなという気持ちがあります。後は、これから結婚・出産と関わってくる年代ではあるので、家族も増えますし親戚も増えますし、そうすると結婚相手の宗教であったり。親世代は、宗教を大事にしてたりしますし、知らないとこの若者はなんなのかというように思われたりする気がして、相手に悪いなと思ったりもします。宗教について考えさせられる機会は今までよりも増えてくるだろうな、というのは一つあります。」

田中「僕は少し知識がある中で、細かなことは知る必要はないかなぁと思いつつも、浄土真宗で一ついいなぁと思うのが、朝は元気に出かけても夕方には灰になって帰ってくるという、人はいつ死ぬか分らないみたいな。」

—それは、おそらく蓮如上人の白骨の御文章のことですね。

田中「それだと思います。だから一日大事にしろというのが、なるほどと言いますか。きちんと仏壇参って一日の目標立てて、一日大事にして帰ってくると、そしてまた仏壇に今日は一日良い日でしたと報告すると言いますか、そういうのはすごいいなと思います。今は仏壇がないからあれですが、人生ってそういうものかなと。」

秋山「私は、仏教の教えとか、そういうのに沿っていることなんだけど、自分たちでそれと分かってなかったりする習慣とかはきっとあると思いますし、そういうことはもっと知っておきたいなと思います。」

澤村「僕はどちらかというと、宗教は雑学っていう意識のレベルだと思います、興味としては。実際、伊澤さんがおっしゃられたみたいに、いざお葬式をあげますという時になったら、必要になってくるとは思いますが、必要になってみないと分からないと言いますか。それは学校の数学みたいなもので、公式は覚えるけど使わなくなったら忘れるに近い知識レベルかなと思います。普段から関わる機会って少ないじゃないですか、その分、そういうことかなと。そこまで知識としてたくさん持っておきたいという意識はないかなと。」

—続きまして、信仰を持ちたいという意識はあるかないか、お聞かせ下さい。

田中「仏教って哲学っぽい感じがあるじゃないですか、それは知識として面白いと思うんです。浄土真宗だろうと何宗だろうと、色々宗派があって、それぞれの哲学があって、それらのバックグラウンドがあって。知的情報として取り入れるのは面白いと思います。知的好奇心として興味はあります。僕自身は、信仰はすでに浄土真宗という認識ですし、特に変わることもないように思います。」

伊澤「今すぐという意識はないですが、これから考えないといけない機会は必然的に増えてくると思いますし、持ちたいというよりは持たないといけないだろうなという感覚があります。今までは自分ゴト化していなかった部分があったように思います。友達同士の会話なんかで、お前何の宗教?といった会話ってしないじゃないですか。でもこれからは、結婚とかもありまして親世代と関わる機会も増えてくると思いますし、そういう意味では、知らないと恥ずかしいことにもなってくるかと思っています。」

秋山「私は、今まで宗教を熱心に信仰している人を何人か身近に見てきたんです。その人たちが宗教を信仰するに至った経緯なんかを聞いてみて、そのきっかけが、独りでは抱えきれない様な悩みから救いを求めて、という人が多くて。それぞれの宗教は違いますが、それぞれ幸せそうで、救いがあってよかったなと思いますし、信仰心は大切だなと思っていました。でも、その人たちとその子供たちの間で、信仰の押し付けじゃないですが、そういう問題があったようで。それが原因だと一概には言い切れませんが、その子どもたちが鬱や無気力といった精神的な問題を抱えているのが目についてしまって。宗教を信仰して前向きになれた、と言う人たちが、どうしてその宗教が原因でもめてしまうのかなぁと思うんです。もちろん、すべての原因が宗教にあるわけじゃないと思います。でも、生きる支えに宗教がある中で、子供たちがそういう状況になるというのは変じゃないかな?と思いますし。その親子間の差は、信仰している親と、信仰させられる子ということなんでしょうか。自分の宗教について、堂々とすることができない今の日本の空気感とかにも問題があるのかもしれないけど。たとえば、もし私が宗教を熱心に信仰していたとしたら、良いものだからみんなに教えてあげたい、という気持ちになって、周りを誘うと思うんです。でもその結果が、誰かの無気力を誘発したらと考えると、私はそれはイヤなんです。だから、私は宗教に支えてもらうより、身近な人と支え合いたいなと今は思ってます。」

澤村「僕は、信仰がどこまでの定義かは分からないですが、もちろん仏壇に手を合わせるとかは自然にすることだと思いますし、実際自分で率先してそういう活動なりなんなりに貢献できるかと言われたら、恐らくそうではないだろうと自分の中では思います。それは知識の問題でもあると思いますし、何が正しくて何が正しくないのか、あるかないかすら分からないという部分でもありますし、分からないことを人に勧められないというのもひとつの部分で。もしかしたら、自然にやる部分での信仰というのは根底としてあるかもしれませんが、意識としてはないかと思います。」

最後に、今日の座談会を通しての感想

伊澤「今回の座談会を聞いていて思ったのは、やっぱり身近な人で宗教について詳しい人と言いますか、宗教ってこういうものなんだよってことを教えてくれる人と言いますか、宗教といっても変なところではなく、仏教といったメジャーなところでいうと、それこそ浄土真宗をもっと知ってもらおうとしてる伊藤さんだったり、そういう感じで、自分たちの近い世代の人がこういう活動をしていることは地味に良いことなんじゃないかなと。田中さんとか、知的好奇心として興味があるという感じで言ってたりすると、そんなに面白いのかなぁなんて思ったりしますし、それこそ今回のように、皆普段は宗教のことなんて考えてないのに、今日この場に集まって宗教のことについて話をしてるから、それ自体も結構すごいことなんじゃないかなぁと思いました。たとえば仏教アンバサダーのような感じで、若者世代を中心に、そういう存在をもっと増やしていければいいんじゃないかなぁと思います。仏教を広めようとしている人って、どうしてもおじさんとかお坊さんとか。お坊さんもおじさんも、どうしても自分たちと身近な感覚ではないので、その人たちが何を言っても全然自分ゴト化しないと言いますか。でも、同世代の人や身近な人、友達なんかが言ってるっていうことなら分かると言いますか。こういうのって大事じゃない?とか、面白くない?とか、そうなると自分ゴト化すると言いますか。そういうことをしていくことが大事なんじゃないかなと思いました。」

田中「お坊さんみたいな人が、あらためて色々やるよりも、なんと言うか良い感じでカジュアルな、この媒体もそうだと思いますが、なんと言うかそういう形で、こういう機会がどんどん増えていけば、もっともっと僕達世代の宗教に対するイメージも良くなっていくんじゃないかなと思いました。」

秋山「それぞれの価値観が色々あって面白かったなと思いました。宗教って敷居が高いですし、正座しとかないといけないのは辛いですし、だから疲れるんです。お経も黙って聞いとかないといけないのが大変だなと思ってて、でも今回の話を通して、そんなにかしこまったことでもないんだなぁと思いました。澤村さんが言ってたように、漫画とかは良いですよね。そういう形で、楽しく、正しいことが分かるんだったら、興味はあるかなと思います。でも、かたい感じだと、ちょっとかまえちゃうから、それだと嫌かなって。」

澤村「日本人独特の考え方かもしれませんが、言語化されるとけっこう引いちゃうとか、主張されるとちょっと引いちゃうとか、ちょっとそういう皮肉振るわけじゃないけど、やっぱりそういうのがあると思うんです。だから、もっと自然に。たとえば、教育の一環ですという風に信仰するんじゃなくて、もっと自然に漫画だったりとか、映画だったりとか、アニメだったりだとか、普段、僕たちの世代が触れている部分からもっと、何かこういう文化があるということが根付いていければ良いのかなと思いました。それが、新興宗教の一環ですというわけじゃなく。たとえば宮崎駿の映画も、色んなテーマがあって、色んな文化圏を描いてると思うんですが、なんかそういう一つの媒体として、今回のフリーペーパーももちろんそうだと思うんですが、目に付く部分に何かしらないと、やっぱり興味としてはそそられないなっていうのは、今回話していてもわかりました。実際、宗教という価値観も、ちょっと前に事件があったりとかで、悪い部分しか取り上げられていないわけで。何かもっと、こういうところが面白いんだよっていう醍醐味みたいな部分って、やっぱり取り上げにくい部分ってあるじゃないですか。こんな活動をして皆幸せになったよという部分であったりだとか、ここを押さえると結構仏教って面白いんだよとか、実際本当はこういう意味なんだよっていうものが、もうちょっと手に取れる部分で、メディアだったりだとかって部分で何かあると、もっと僕たちも興味を持てるんじゃないかなと思いました。」

—以上

INTRODUCE

それぞれ皆さん、分野が違いますが同世代というキーワードで繋がっています。今回座談会にご参加頂いた皆様のご紹介。

YUSUKE TANAKA
田中 佑典

LIP OFFICIAL WEBSITE
http://lipbox.p2.weblife.me
LIP FACEBOOK
https://www.facebook.com/liplab

台湾女性ボーカルオーディション『發現台日新女聲』コーディネート

日本大学芸術学部在学時より、カルチャーマガジン「LIP」の発刊を行う。大学卒業後、クリエイティブエージェンシー「Yes,I am.」にて様々なメディアの企画や編集を経験しフリーランスに。アジアに目を向ける中で、台湾におけるカルチャーに強い関心を持ち渡台を重ね、クリエイターやアーティストたちとの独自のパイプを築く。現在は日台のブリッジコーディネートを主にキャリアを重ねる。

日台をつなぐファッションアイコン「KUSA」プロデュース

日台ファッションショー『Snapeee Fes 2013』ディレクション

KIYOKA AKIYAMA
秋山 清香

モデル業の傍ら、移動式室内カフェ「KIYO CAFE」を展開。「人は日常の中に突如訪れるイレギュラー感に魅力を感じる」という自説のもと、食だけでなくアトラクションやストーリー性など、様々な要素を取り入れ、イレギュラーな空間をテーマに活動を続ける。

KIYO CAFE vol.1 ポスター

浅草写真館 表紙モデル

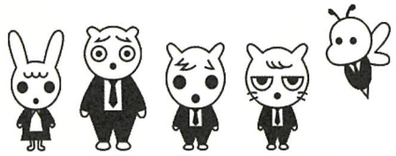
『tip top HAIR CATALOG 2013 Winter』巻頭ページモデル

RYOTA IZAWA
伊澤 諒太

株式会社ハタプロ
http://hatapro.co.jp
しゅうかついったー
http://www.hatapro.com
キャリアデザインハウス
http://career-dh.com

「Evernote」日本法人のアンバサダーを兼務

ボクシングに打ち込んだ高校時代。全国大会では現世界王者である、井岡一翔氏との対戦経験もある。しかし、目の怪我が原因で現役を引退。大学時代にソーシャルメディアの可能性に目をつけ、'09年にツイッターを活用した就職支援活動サイト「しゅうかついったー」の運営を開始。日本最大級の就活支援団体へと変貌を遂げた。現在は全国の大学や企業で講演を行う傍ら、世界に目を向けたキャリア教育企画やデジタルマーケティング等、精力的に活動を続けている。



スマートフォン就活支援団体
しゅうかついったー

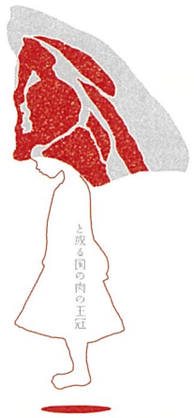
しゅうかついったーWebキャラクター

ハタプロ!

YUSUKE SAWAMURA
澤村 祐介

高校時代、日本画家であった美術教師の影響を受け芸術大学を目指し、その後資生堂の広告に衝撃を受け大学ではデザインを専攻。大学時代には立体という三次元への関心が深まり、洋服を媒体として、グラフィックやデザインを作品に落とし込んだブランディング提案という形での卒業制作を発表。台東区区長奨励賞を受賞した。また、大学院時代には食に興味を持ち、現在は衣・食・住をトータル的にプロデュース出来る「空間」を作ろうと意欲的に活動している。

Sometimes,the Adult is Darling. / wear



Sometimes,the Adult is Darling. / pamphlet

Sometimes,the Adult is Darling. / shoes

SOCIAL PRACTICE

PICK UP!!

Tell mee times
MIYA NISHIYAMA

TEXT/KENJI ITO

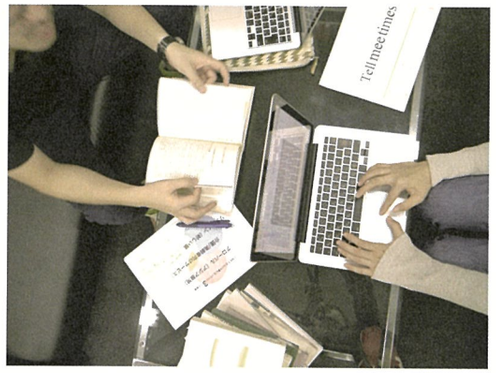
社会実践には様々な研究テーマが存在する。
その中の一つである、介護問題。
真宗においては、今後この問題に対してどのようなアプローチをかけていくことが出来るのであろうか……。
立場は違えども、アートディレクターという視点から、介護問題に取り組む一人の若者を紹介したい。

『Tell mee times 編集長・西山美耶さん』

『Tell mee times』という新しいメディアへの取り組みを図る、若手アートディレクターがいる。西山美耶氏だ。彼女に介護経験はない。
けれど、そんな介護未経験という立場であるからこそ、このメディアを立ち上げる意味があったと彼女は語る。

仏教と介護問題の関係性前々から気になっていたんです。

介護未経験からスタートした西山氏。介護問題について触れていく中で、『仏教』というワードを見聞きすることもあったそうで、その関係性について興味を抱いていたとのこと。今回のこの企画を通して、介護や仏教に対しての思慮を深めれたらと彼女は語った。



『介護問題』

現在の介護問題は、様々な問題と関連し合う中で多様化が進み、かなり広範囲で捉えなければならない問題となってきていると言える。核家族化により引き起こされる、高齢者の孤独死や生活困窮問題。地方に暮らす親の元に都市部から子どもらが通う、遠距離介護問題。介護疲れにより引き起こされる様々な事件など。このように、広がりを見せる介護問題に対して、真宗ではどのようなアプローチが考えうるのであろうか。そして、西山氏はどのようなアプローチを考えているのであろうか。

西山氏は介護におけるコミュニケーションを考える上で、世代を3つに分類したという。第1世代（シニア世代65歳以上）・第2世代（団塊世代35歳から65歳）・第3世代（若者世代19歳から35歳）の3世代。そして、これを〈要介護者・介護経験者・介護未経験者〉と分け、この第3世代である〈介護未経験者〉による第2世代・第1世代へのコミュニケーションの道を作るべきではないかと考えたという。

第3世代に介護問題と関わってもらうこと。それが必要なんじゃないかと思ったんです。

そこで、自身のこれまでの経験を活かすことができ、また第3世代の興味関心を集めることの出来る方法を、ということで「メディアによるアプローチ」に想いが至ったという。

『Tell mee times』は、〈介護未経験者〉と〈介護経験者・要介護者〉の間をつなぐメディアというコンセプトから発足に至った。介護経験者の悩みや苦しみを未経験者である者が少しでも理解し、和らげていきたいという想いが込められている。このアプローチは、視点として、介護問題でこれまで取り上げられることのなかった、被介護者のみならず介護者へのケアまでを通したアプローチと言えるのではないだろうか。そして対象は介護未経験者。それはつまり、「きっかけ作り」である。介護問題を、介護に関わりのない世代の人たちにもっと知ってもらいたい。そのために、その世代に届く方法で。真宗においても、「きっかけ作り」というアプローチは、大切にしなければならない点ではないだろうか。

介護問題を取り上げる中で、『Tell mee times』は本質として、介護問題に取り組む方々の「心のケア」をキーワードにしていると言える。この点は、真宗における介護問題への取り組み方と共通しているのではないだろうか。

真宗における「介護問題へのアプローチ」は様々にあるが、「心のケア」は最も大切な取り組みである、と言える。仏教の教えの中では、「仏様から真の心を頂いた人たちには、目の前で苦しんでいる人たちの苦しみを抜き、やすぎらを与えようとする一面がある。」と説かれており、「心のケア」は真宗における実践運動の一つとして取り上げられている。

つづく

『終わりに』

今回、『Tell mee times』のコンセプトの一つである「メディアを介した若者世代へのアプローチ」が、当誌のコンセプトと同じであることに驚きを隠せなかった。また、西山氏のアートワークを拝見する中で、この感性で仏教雑誌を作ってみたら面白いのではないだろうかと考え、JISSEN04のアートディレクションを西山氏にお願いしたところ、快く承諾頂き、今回西山氏アートディレクションによる仏教雑誌の制作が実現するに至ったことに感謝の意を表したい。

WHAT'S MIYA NISHIYAMA

福岡県福岡市出身
株式会社「マッシュスタイルラボ」にてブランド「gelato pique」の店長を約5年を勤める。
退社後、フリーのアートディレクターとして雑誌のエディトリアルデザインから空間デザインまで幅広く手がける。
介護メディア『Tell mee times』や、アーティストの配信ジャケットデザイン、ファッションショーの空間デザインなど。
また自身のアクセサリーブランド「eene meene mynee moo」のデザイナーとしても活動中。

WORKS

日本と台湾をつなぐブリッジクリエイティブラボの雑誌
LIP/離譜のアートディレクション
http://lipbox.p2.weblife.me/

テキスタイルブランド『eene meene mynee moo』

eene meene mynee mooはどれにしようかな?という意味

迷って迷ってとっておきのお気に入りを見つける楽しみを提案していくブランドです。
そしてもう一つ。eene meene mynee mooの提案する新しいコンセプト。アイテムの全てに使用している生地は、玉葱の皮で染織しています。
玉葱の皮は本来捨てるはずのものですが、ゆっくりゆっくりと時間をかけると、とっても素敵な色となり、この世にたった一つ自分だけの宝物に変身します。
本来捨てるはずのものが宝物に変わっていくリユースの心。
そんなストーリーがアイテムひとつひとつに宿っています。

●facebook page
https://www.facebook.com/tellmeetimes

●HOME PAGE
http://nishiyamamiya.com/pg33.html

●Tell mee times 編集部へはこちらまで。
tellmee.times@gmail.com

介護未経験者と
介護をしている方々を
つなげるメディア

Tell mee times.

nishiyama miya
contact-nishiyamamiya@gmail.com
HP-http://nishiyamamiya.com/index.html

PRACTICAL ACTIVITIES

TEXT/KENJI ITO

実践真宗学研究科を修了し、早くも大阪に念仏道場を立ち上げた人物がいる。平野正信氏(以下平野氏)だ。

平野氏は在家出身であり仏教徒でもない家庭で育ったという。そんな平野氏が念仏道場を立ち上げるまでには、いったいどんな経緯があったのであろうか。

高校を卒業後、「ぶらぶらしていた」という平野氏であったが、いつまでもそうしてはいられないと、家業である学習塾で働くため24歳で龍谷大学の教育学へ入学。そして、必修科目として履修した仏教の講義で、平野氏は初めて仏教に出遇うこととなった。講義を受講する中、次第に仏教に興味を持ち始めた平野氏は、いつの間にか仏教に惹かれていったという。

「お念仏申しながら人生を受け入れていく仏教徒たちと出会い、いつの頃からか生き方として仏教を聞き、仏教徒として生きていきたいと思うようになったんです。」

仏教との出遇い、そして仏教徒たちとの出会いは、いつしか平野氏を僧侶という道へ推し進めた。その後、平野氏は本研究科へ進学。院生時代には、現代における伝道というテーマのもと、インターネット伝道を研究。そして修了後の現在は、実家の家業である学習塾で働いている。

「生活のための仕事は学習塾。けれど、たとえ赤字でも本職は僧侶です。僧侶として生きたいと思ったんです。」

初めは、仏教の勉強会などが出来るプレハブ小屋を建てようと考えていた平野氏。しかし、プレハブ小屋と言ってもそこそこの費用がかかる。

どうせ一生涯の仕事としてやるならばと、しっかりした木造建築を建てることにしたという。こうして念仏道場「桜蓮寺」は、建設されるに至ったのであった。そして、2013年6月には無事落慶法要も終わり、念仏道場「桜蓮寺」の歴史が始まることとなった。

念仏道場「桜蓮寺」のスタートは切ったものの、お参りに来る人はまだ少ない、と平野氏は述べる。

「今は、布教使として外へ出たり、お参りや法事などでお宅へ伺ってお話をするといった活動が主ですね。」

ときに、イラストレーターとしての顔も持つ平野氏。仏教書の表紙絵や、仏教雑誌などでイラストの仕事をこなす。2013年より開設された『浄土真宗の法話案内』というウェブサイトでは、創設メンバーとしてイラストを担当している。

西光義秀（2013）
『私のものさし　仏のこころ』
探究社　表紙絵担当

また、自身でもホームページやブログ、TwitterやFacebookなどを使い様々な活動を行なっており、院生時代にインターネット伝道を研究テーマにしていた平野氏にとっては、まさに専門が活きているといった印象であった。

「兼業で伝道に取り組む人が増えると良いと思っています。その可能性を模索したいんです。」

大阪で念仏道場を立ち上げた平野氏。これからは、都市部における伝道スタイルの模索、を続けていくことになるのではないだろうか。

念仏道場「桜蓮寺」の歴史はまだまだ始まったばかりである。当研究科の第一期生である平野氏の念仏道場立ち上げは、後に続く後輩たちに〝実践〟というものを、身を持って示すことになったのではないだろうか。

小さいながらも、お念仏の声が息づく道場として、これからも運営していって頂きたいと想う。

平野正信（33）
1980.9.5 生まれ
大阪府出身
龍谷大学大学院
実践真宗学研究科修了

■念仏道場桜蓮寺
2013年6月5日　落慶法要

■主な活動
桜蓮寺での勤行
月参り
寺報の発行
葬儀
ペット葬儀
仏事相談
人生相談等

■イラストレーターとしての活動
仏教こども新聞表紙絵・本の表紙イラスト・インターネットサイトのイラスト　他

■参考
浄土真宗の法話案内
http://shinshuhouwa.info/

桜蓮寺庵主ブログ
http://orange.cooklog.net

仏教こども新聞 11 月号（2013）表紙絵担当

PRACTICAL ACTIVITIES

TEXT/KENJI ITO

浄土真宗×影絵

龍谷大学大学院実践真宗学研究科に、影絵をつかった新たな真宗伝道に取り組む集団がいる。「ともしえ」だ。現在は一般寺院での講演を主な活動として取り組んでいるが、ゆくゆくは、公共施設等での伝道活動を視野に入れているとメンバーの石川氏は述べる。

浄土真宗×影絵という組み合わせ。表現というものには必ず相性というものが存在する。事象そのものが持つイメージとイメージのすり合わせ。影絵の持つ光と影のコントラスト。そこにカラーフィルムを用いることで、イメージの相乗を図る。どこかノスタルジーで幻想的なイメージ。そして、そのイメージを浄土真宗の伝道に用いたのが、この「ともしえ」というプロジェクトである。

「ともしえ」は劇というスタイルをとる。真宗の大切な教えである二河白道や、仏教の教えには欠かせない、四門出遊といった教えを影絵によって表現し、ストーリーに多少のオリジナリティは加えるが、そこに示される本質的な教えを崩さないよう、丁寧に台本を制作し演じている。また、劇というスタイルをとることで、聞き手が登場人物に感情移入し、教えというものをもっと自分ゴトとして捉えてもらえるのではないか、と石川氏は述べる。

浄土真宗と影絵という組み合わせ。イメージの相性はまさに良好である。劇というスタイルの持つ伝わり易さは、伝道に適していると言えるのではないか。また、影絵というアート表現にこだわることで、伝道に現代性を取り入れることができるのではないだろうか。この先の活動展開が気になるプロジェクトの一つである。

■活動詳細

1回の活動は、影絵と法話を合わせて短くて45分程度。映写機・照明・音響設備等はすべて持参し、依頼があれば全国場所時間を問わず活動を行う。

■活動予定

2014年 1月11日 大阪教区 観念寺【新年門信徒会】
2014年 4月 6日 大阪教区 正善寺【花祭り】

■過去の活動

2013年 3月19日 佐賀教区 正念寺【彼岸会法要】
2013年 3月20日 福岡教区 西光寺【彼岸会法要】
2013年 4月 6日 大阪教区 顕証寺【花祭り】
2013年 6月18日 大阪教区 浄行寺【常例法座】
2013年 9月 6日 大阪教区 光福寺【門徒講座】
2013年 9月 7日 大分教区 真正寺【門徒講座】
2013年10月19日 大阪教区 大親寺【報恩講法要】
2013年10月27日 東海教区 法盛寺【永代経法要】
2013年12月22日 大阪教区 大親寺【常例法座＆お餅つき大会】

■Webサイト
ともしえ.com

■問い合わせ
実演依頼や取材申込み等はこちら
e-mail: tomoshie@outlook.com

PRACTICAL ACTIVITIES

TEXT/KENJI ITO

グチコレ

僧侶だからこそ出来る〝何か〟とは何かを模索しながら活動を続ける

新進気鋭という言葉がふさわしいのではないだろうか。広範囲に渡った活躍をみせる、西本願寺2nd ウェブサイト「他力本願.net」のコンテンツ、「グチコレ」である。前号でも紹介したこのコンテンツ。その後、新聞やラジオ、テレビなどに取り上げられ、活動の場も路上から公共施設や飲食店へと広がりを見せている。間違いなく、本研究科院生における実践活動の中で、今もっとも勢いのある活動の一つと言えるであろう。

当初は5名程度からの出発であった「グチコレ」も、現在では20名近くを抱える団体へと変貌した。活動回数は50回を超え、集まったグチの総数は2000を超える。

何と言っても、グチコレの魅力はその切り口にあると言える。一般的にはネガティブなイメージで捉えられがちなグチであるが、そんなグチを人の本音ではないかと考え、ポジティブに捉えようというのが「グチコレ」の基本理念である。代表の藤原氏は「様々な場所で多くの人の愚痴を聞くことで、現代社会と宗教者の接点・意義を模索しています。また、愚痴をウェブ上で世の中に共有することによって、現代人の抱える孤独という問題を解決しようと活動しています」と述べる。

一般社会においては、こぼすことが躊躇われてしまうグチ。それはきっと、人にストレスを生ませる要因の一つになっているのではないだろうか。つまりはストレス社会に帰結する。そんな現代社会に、僧侶という視点を交えて、僧侶だからこそ出来る〝何か〟とは何かを模索しながら活動を続けるグチコレクターたちであった。

■グチコレ活動詳細

不定期ながら週1ペースで月に4回程度、京都タワー下を中心に活動。また、京都市南青少年活動センターや京都坊主BAR等、様々な場所で出張グチコレという形態での活動も行う。

■掲載メディア

《新聞》
2013年 5月13日 京都新聞（夕刊）
2013年 5月16日 毎日新聞（夕刊）
2013年 6月10日 本願寺新報
2013年 8月20日 読売新聞（夕刊）
2013年10月20日 本願寺新報
2013年12月 7日 中外日報
2013年12月18日 文化時報

《ラジオ》
2013年 5月24日 KBS京都「笑福亭晃瓶のほっかほかラジオ」
2013年 6月 4日 JFN系列全国ネット番組「face」
2013年12月24日 NHKラジオ第一放送「関西ラジオワイド」
2014年 1月27日 NHKラジオ第一放送「ここはふるさと旅するラジオ」

《TV》
2013年 7月 2日 朝日放送「おはよう朝日です」
2014年 1月11日 NHK総合テレビ「週末応援ナビ☆あほやねん！すきやねん！」
2014年 1月22日 NHK総合テレビ「ニュース610 京いちにち」

■Webサイト
グチコレ
http://tarikihongwan.net/collection

■お問い合わせ
出張グチコレの相談や取材申込み等はこちら
e-mail: r.guchicollection@gmail.com

SORYOforEverything

「現代の生きづらさについて」

実践真宗学研究科　3年次生
小島杏子

まず苦しみがある。その苦しみに対するとき、浄土真宗はなにが出来るのだろうか。

そのようなことを考え始めたきっかけは、大学時代の友人たちにある。働き始めて3年目を迎える同級生たちのうち、その生活に限界を感じている者は少なくない。人間関係が上手くいかない、仕事内容がつらい、それでも働くということから離れるのは人生をリタイアするようで出来ない。様々な声を耳にするが、その根底にはどこか共通した問題性があるように感じていたことが、今回の研究へと繋がった。

そこで、まずは苦しみの在り様を明らかにするべきであろうと考え、「いま、生きづらい、しんどい、苦しい、と感じることは何ですか?」という問いを設定し、同世代の男女8人にインタビュー形式でのアンケートを実施した。アンケート結果で特徴的だったのは、挙げられた意見のどこにも、今日明日のいのちの心配に関わるものがないという点であった。

「あと40年も働くと思うと夜も眠れなくなるときがある」「この先、楽しいこともあるだろうけど、それよりもっと辛いことや悲しいことの方が多い気がして、寿命80年は長すぎて憂鬱」など、アンケートで挙げられたこれらの言葉は、放っておいても80歳近くまで生きられるだろうという暗黙の了解のうえに成り立っていると言えよう。明日いのちを落とすかもしれない、と心配することのない世のなかで生まれてくる問題とは果たしてどのようなものなのだろうか。

アンケート結果を踏まえて、注目すべき問題点をひとつ挙げるならば、「生きていくことの実感が薄い」ということである。「現代の生きにくさ」とは、一生懸命にならずとも、なんとなく生きていけてしまう状況にあって、非常にぼんやりとしたものになっているのではないだろうか。生きるうえでの軸のようなものを、持てないでいるのかもしれない。

そして、このように「生きていくことの実感が薄い」ということは、同時に「死んでいくことの実感が薄い」という現状を表していると考えることができよう。

現代人が抱える諸問題の背景には、様々な要因があるのだろうが、宗教がそこで何かできるのだとしたら、この「死んでいくことの実感が薄い」「死にゆく存在である自分を意識できない」という心の部分を見つめていくことがひとつの重要なポイントになるのではないだろうか。

生きている実感、死んでいくことの実感が薄い、といった問題が、世のなかの全体ではないが、一部にはあって、そこを見つめ、取り組んでいくことで、また全体を捉えることにも繋がっていくと考える。

自らの生を受け止めていくという営みのなかで、浄土真宗はどのような役割を果たすことができるのか。

煩悩を断ち切ることの難しい私という存在は、自ら苦しみを生み出していく。苦しみは無くならない。苦しみは無くならないが、しかし、広大無辺のはたらきに触れていくことで、私たちの苦しみは少し、形を変えられていくだろう。そこには、以前とは少し違った物の見方をする自分がいるのかもしれない。

「真宗と科学の関係」

実践真宗学研究科　2年次生
入江楽

現代社会における真宗伝道を考える際、科学という分野と真宗はどのように向き合うかということは避けて通れない。

なぜなら伝道の対象となる人々、そして伝道する側の私たち自身も、受けてきた教育や育った環境によって「科学的に物事を観る・考える」ことが思考の前提にあるからだ。広く社会を見渡しても、私たちは科学の恩恵を様々なかたちで受けていることが分かる。

にも関わらず、「真宗と科学の関係」についての、真宗の研究者からのアプローチは驚くほど少なく、実際にどのように向き合い関わっていくべきかについて、十分に議論・研究されているとは言い難い。

その理由は種々考えられるであろうが、一つに真宗に携わる者の間で、「科学」に対する関心が薄いということが挙げられる。

現在の真宗を含めた宗教と社会との関係を、「非宗教的社会」と表現する向きがあるが、ことに仏教に関しては、その根本的な原因は、仏教界全体の無関心を貫く閉鎖的な姿勢にあったと言わざるを得ない。

では一体、真宗は科学と、どのような関係を築いていくべきなのだろうか。

私は、両者がこれから築いていくべきは「対話」の関係だと考えている。具体的には、「生老病死」を始めとした、現代社会に生きる人々が抱える多種多様な苦脳の解決に向けて、真宗と科学が互いに協力していくという関係である。科学は「もの」の構造や機能を研究する営みであり、そこには「私はなぜ生きているのか。どのように生きていけばいいのか」など、生命の存在意義や意味といった視点は含まれていない。それを見落として科学に偏重した結果、現代社会では人間関係が意識されることが少なくなり、自身の生きる意味が見出せない状況に陥っている。真宗の教えは、この科学に欠けている生命の存在意義や意味を提供することができるので、「対話」の関係を構築できる。

ここで重要なのは、真宗の教えから、生命の存在意義や生きる意味を見出すことができる根拠である。

それは、「全てのものは自分の好き嫌いなどの思いとは無関係に、自らと関連のある存在で、無くてはならない在り方をしている。

自分という存在は一瞬ごとに生まれては死に、死んでは生まれ、という生滅変化を繰り返している」と捉える、仏教・真宗独自の見方に求められる。私たちは普段、周囲の人やものを、自らのための道具としてしか見られないところがある。そのような見方と、仏教・真宗の見方を重ねたとき、自らの迷いの深さを知らされつつも、なお自分を照らし出してくれる存在があると気づかされ、自身と全ての存在との繋がりを認識し、周囲全ての存在を道具でなく、目的と観ることができるようになる。そして、自分が今、ここに生かされていること、自分に与えられた役割があると気づくことで、最終的に「人間として生まれた意味」が完成するのだ。

以上が、現時点での私の研究段階である。これからは、理論的な考察だけでなく、実践を通して「真宗と科学の関係」を模索していきたい。

SORYOforEverything

法話

慈光はるかにかぶらしめ　ひかりのいたるところには
法喜をうとぞのべたまふ　大安慰を帰命せよ

実践真宗学研究科　３年次生
喜多村奏

大学院生活も今年で二年目になり、私に、というよりも大学院生全員に刻々と迫ってくるものがあります。「修士論文」です。私はこの四万字という大きな修士論文の壁が高く、どうしようもない苦痛に感じ、考え込み、自分がどうしたらいいのかわからなくなってしまいました。まさに苦悩の真っただ中にいる気がしました。私は「どうにかこの悩みから脱出して安心したい」と思い、すがる思いで父に電話してみると、「あ、もしもし父さん？ちょっと相談したいことがあるんやけど…」「ああぁ。ちょっと今忙しいけん後でかけ直すね。」と、切られてしまい、「しょうがないか」と区切りをつけて電話を待つことにしました。私の下宿先には小さめのご本尊をご安置しておりますが、電話を待っている時、ご本尊である阿弥陀様がふと目に入りました。当時、私にはかなり辛い時期でしたので、なぜかわかりませんが勝手に阿弥陀様にお願い事をしていました。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。私はどうすればいいでしょうか？」

そもそもお念仏というのは、お願い事に用いるものではなく、「われにまかせよ。かならず救う。」という阿弥陀様から私に対してのはたらきかけである、というのが浄土真宗のみ教えです。ですので、阿弥陀様のはたらきかけと、私の願いが当然一致することはなく、私にとって辛い時間がすぎるだけでした。そうしているうちに父からの電話がありました。

「ごめんごめん、さっきの電話の件やけど。」

父は私に「こんなことをしてみたらどうだ。」などと色々とアドバイスをくれます。しかし父のアドバイスを聞いても、一向に私の悩みがはれる気配がなく、次第に苛立つ私がいました。そんな中、苛立つ私に父はこのような言葉をかけてくれました。「この先どうしていくか、一緒に考えような。」この言葉を聞くと、徐々に苛立ちがおさまり、不思議と安心につつまれたような気がしました。この父の言葉から考えさせられることがあります。私から安心を求めようとすると、自分の要求と相手から与えられるものが違う時に、そこに余計にストレスがかかってしまうものです。そのような、私から求めていく安心ではなくて、一緒に考え、一緒に悩みながら、歩みともにしてくれる、そんな存在から安心させてもらえるのだなぁと。

『仏説無量寿経』という経典には「もろもろの衆生において視そなはすこと、自己のごとし」という言葉があり、阿弥陀様は生きとし生けるもの全ての苦悩や悲しみを、我が事として見て下さる、とあります。私の元に届き、南無阿弥陀仏「われにまかせよ。かならず救う。」と声の仏様となって、私の苦しみ悩みを我が事として背負い、一緒に歩んで下さっているのです。私にとってのどうしようもない問題や悩みを解決したり、願いを叶えてくれるのではなく、一緒になって悩み苦しんでくださる仏様だからこそ、大きな安心と慰めを恵んで下さるのだと、父との御縁を通して阿弥陀様の大悲に遇わせていただきました。また私の人生において、今回の出来事のように父が「一緒に考えよう」と言って私に安心感をくれたり、ある時には家族や、古くからの親しい友人と一緒にいて得られる安心感もあります。

しかし、この世界で得られる安心と阿弥陀様に恵まれる安心とは違いがあるようです。それは、いつかは無くなってしまう安心と、どんなことがあっても無くならない安心という違いです。私にとって家族や友人はとても大切でかけがえのない存在です。しかし、私達は必ず別れていかなければならない関係であって、一緒にいることができる安心もあるが同時に、いずれ無くなってしまうものでもあり、どうしようもない深い悲しみも含んでいるのだと、仏教は私に教えてくれます。家族や友人を頼りにすればするほど、別れていく時の悲しみは大きなものになるでしょう。

阿弥陀様は、私たちの力では最後の最後まで一緒に歩んでいくことがどうしてもできない、必ず別れがある、ということをあらかじめ見抜いてくださっていました。だからこそ南無阿弥陀「われにまかせよ。必ず救う。」と声の仏様となって、私達が一人一人と共にこの人生の最後の最後まで一緒に歩んでくださり、この世との縁が尽きた時には、私達が今度は全てのいのちに寄り添い、大きな安心と慰めを恵み、決して別れることのないいのちへのなかに生まれさせていただけると、受けとめさせていただいてます。

この度の「大きな壁」に直面したことは、自分にとって大きな悩みではあります。しかしそれと同時に阿弥陀様は決して消えたり無くなったりすることのない、大きな大きな安心と慰めを恵んでくださる仏様であると聞かせていただく有り難い御縁でもありました。

南無阿弥陀仏

ほうわ

願作仏の心はこれ　度衆生心のこころなり
度衆生の心はこれ　利他真実の信心なり

実践真宗学研究科　２年次生
藤實乗教

ご讃題として挙げさせていただきましたのは、親鸞聖人がお作りになった高僧和讃の中にある天親讃です。天親菩薩というお方は、インドの高僧であり浄土真宗では七高僧の一人として大切にされています。親鸞聖人の「親」の字は、天親菩薩の「親」の字から頂いたと言われていることからも、窺い知ることが出来ます。今回は天親菩薩の徳を讃えられたご和讃を通して、浄土真宗のお心について味わせて頂きます。

まずこのご和讃について、簡単に説明いたしますと、仏に成ろうという心は、あらゆる人々を助けたいと思う心であり、それは如来より頂いた真実信心の徳によるものだと詠われているのです。親鸞聖人はご本典で、大慈悲が仏道の正因だともおっしゃっています。このご和讃は親鸞聖人のお説きになられた、現生における念仏者の利益である「常行大悲の益」と重なるところであります。「常行大悲の益」とは、信心を頂いた念仏者は如来様の恩を知ることにより、称名念仏を通して人々にご本願を伝えることになるということです。またそのことが仏恩を報ずることにもなるのです。このような大悲を行じさせていただくことは、日頃の私の姿が厳しく問われてくるところです。

現在私が学んでいる龍谷大学の実践真宗学研究科では、現代社会に対応できる伝道方法論や社会実践といった、現実に即した研究がなされています。ここで私は、多くの人々が親鸞聖人のお示しになったお念仏のみ教えに出遇って頂くことによって、悩みや苦しみを解決していただきたいと思い、特に布教伝道について学ばせて頂いております。そして、親鸞聖人のみ教えを多くの人々と共に喜び、共有して行けるような社会を作っていきたいと願うことであります。

大変偉そうなことを申しましたが、実は常にこのように思えるような立派な私ではありません。日々の生活を省みれば、自己中心に振る舞い迷惑をかけるばかりで、まったくお恥ずかしい限りであります。しかし、このような私でもいよいよ如来様の救いがこのいたらない私をお救いになられ、如来さまは決して見放すことなく、しっかりと大悲の中で受け止めてくださっているということを、最近では感じさせて頂いております。それは偏にお念仏の教えに出遇わせて頂いたからであり、その教えに導いて下さったよき師との出遇いがあったからであります。

以前までの私は、狭い視点でしか浄土真宗を捉えていませんでした。そんな私に新しい視点を持たせていただき、そこからお念仏に生きるということについて、深く考えさせられ、自分の捉えていた、み教えの理解がいかに浅いものだったかを知らされたのです。このような師との出遇いは、偶然と言う言葉だけでは片付けられないと強く思うことであります。このような出来事はまさに不思議なめぐりあわせで、如来様のはたらきの中でお育てを頂いていることを深く感じるのです。このような如来様のご本願への感謝の思いから、凡夫である私にも出来ることは、真実の教え、本当の私に出遇わせて頂いた如来様に報謝していくことであり、それはまさにお念仏をすること通して、常行大悲の益をめぐまれた私が、生きぬかせて頂くことであります。そのことは仏徳を讃嘆することにもなるのです。

私がこのような思いを持ち伝道して行こうと思えるのも、かつて私が如来様の恩について何も知らずに迷い続けていた身であるからこそ、人々にもこのご本願に出遇ってほしいという願いからなのです。このような心が起こるのも願作仏心であり度衆生心である利他真実の信心によるのだと親鸞聖人はおしゃっているのであると味わせて頂いております。

称念

JISSEN DIARY

MAY 5

DAY21　裁判所傍聴 ／ 社会活動部会

JUNE 6

DAY19　犯罪被害者特別講義 ／ 院生企画

DAY30　比叡山見学 ／ 宗教活動部会

JULY 7

DAY20　実践瓦版 vol.8 発行

DAY23　常清の里贈呈念珠制作 ／ 宗教活動部会

DAY27　ビハーラ本願寺夏祭りお手伝い ／ 実践真宗学研究科一回生

AUGUST 8

DAY06　合同研究室大規模図書整理 ／ 図書部会

SEPTEMBER 9

DAY12　常清の里感謝状贈呈式参加 ／ 宗教活動部会

DAY17　研究発表＆懇親会 ／ 会計親睦部会

NOVEMBER 11

DAY21　実践シンポジウム

DAY29　実践報恩講 ／ 勤式活動部会

STUDY MEETING

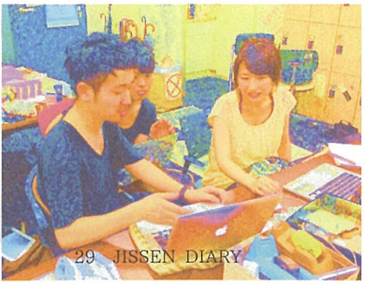
帰真会

声明勉強会

雅楽勉強会

Adobe 勉強会

サブゼミ



他 INFORMATION

西本願寺 2nd Website

他力本願.net

OPEN

様々な世代の悩みや関心に応える多数のコンテンツを展開。

『JISSEN 04』
2014年4月1日発行

発行 PUBLISH
龍谷大学大学院
実践真宗学研究科院生部会 出版部

〒600-8268
京都市下京区七条通大宮東入大工町125-1
龍谷大学清風館3F
実践真宗学研究合同研究室
TEL 075-366-0621
MAIL r.jissen.publish@gmail.com

EDITOR-IN-CHIEF
伊藤 顕慈
KENJI ITO

ART DIRECTOR
西山 美耶
MIYA NISHIYAMA

WRITER
戸田 栄信
HIDENOBU TODA

【表紙】 黒白二鼠図

＊この活動情報誌『JISSEN』は、龍谷大学大学院実践真宗学研究科院生が、実習の一環として主体的に取り組み発行するものです。

JISSEN SYMPOSIUM

TEXT/HIDENOBU TODA

実践真宗学研究科公開シンポジウム

人々の苦悩が蔓延し、人生を完全燃焼していくことが困難な時代となった昨今。今年の実践真宗学研究科公開シンポジウムでは、「現代社会の苦悩に寄り添う～宗教者に求められているもの～」というテーマをもって開催された。

今回のシンポジウムにおいて、東京大学名誉教授であり宗教学者である島薗進氏、朝日新聞オピニオン編集部記者の磯村健太郎氏、龍谷大学大学院実践真宗学研究科教授の葛野洋明氏、この宗教を熟知しながらも立場の異なる3名のパネリストから、それぞれ提言があった。

島薗進氏は、現代社会において人々の宗教離れ、無宗教ということが言われているが、そういった時代だからこそ宗教者ができること、宗教に期待されていることがあるのではないか、ということを提言した。

また、東日本大震災における宗教者の支援活動を紹介し、そこから「寄り添い」という言葉の意味を語った。島薗氏の語る「寄り添い」とは、相手の話を聞き、相手の望みを受け止めるということである。

最後に、これからの仏教は、社会から「寄り添い」といった、人々への「スピリチュアルケア」ということを求められるのではないか、と締めくくった。

葛野洋明氏は、まず実践真宗学研究科の院生の活動を紹介し、宗教者の実践とは画一的ではなく様々であるということを述べた後、これらの様々な実践と、自分自身の宗教をどのように関連させていくかということが、大きな課題であると指摘した。

葛野氏は続けて、宗教者（念仏者）の実践の根本は仏徳讃嘆であると提言した。この私が、他人に対し何かをしてあげるというのではない。自らの宗教への喜びをはっきりと明示していくことが社会貢献になっていくのだ、ということである。今回のシンポジウムを通しては、宗教者が社会から何を求められているのかという点、また、何か活動をする際に、なぜその活動を宗教者がしなければならないのかといった点について様々に提言した。

磯村健太郎氏は、主に貧困問題について、宗教の内からではなく、社会の側から提言し、「見えにくい貧困」というキーワードを挙げ、誰にも相談できず、生活保護も受けていない、行政の把握していないところで孤立して、貧困に喘いでいる人々が社会にたくさんいるということを指摘した。そして、人が人に寄り添っている例として、貧困に喘いでいる方々に対して行っている活動をいくつか紹介した。

みんなが幸せになるということは、現実的に不可能なのかも知れない。しかし、現代社会では、このような理想を掲げるということが必要であり、その理想に向けてどこまでも進んでいこうとする宗教者の後ろ姿を、社会の側は見たいのではないかと、このように磯村氏は聴衆に投掛け、話を終えた。

宗教者1人1人が、現代社会にどう関わっていくのか、深く考えさせられるシンポジウムであった。